

<研究論文>文化としての「桜桃忌」と新聞の関連報道

著者	劉 宇?
雑誌名	日本研究
巻	57
ページ	221-242
発行年	2018-03-30
その他の言語のタイトル	Otoki ("Cherry" Anniversary of Dazai Osamu's Death) as Cultural and Related Newspaper Coverage
URL	http://doi.org/10.15055/00006930

文化としての「桜桃忌」と新聞の関連報道

劉宇婷

はじめに

周知のとおり、一九四八年六月十三日深夜から十四日未明にかけて、太宰治は戦争未亡人の山崎富栄とともに玉川上水に入水した。遺体は十九日の太宰の誕生日に発見された。この事件を、新聞は盛んに報道した。やがてそれが一段落すると、舞台は雑誌に移った。週刊誌や文芸雑誌などが追いかけるようになり、追悼特集まで組まれた。

このようにメディアのセンセーショナルな報道により、ジャーナリスティックな意味合いにおける太宰治に関する認知度は、飛躍的

に広がっていた（川崎 二〇〇五）^①という。筑摩書房の社史によると、太宰治の『ヴィヨンの妻』などは、もともと売れずに倉庫に山積みになっていたが、「太宰治が玉川上水へ飛び込んだ途端に、新聞でも、ラジオでも、連日太宰を話題に取り上げ、『ヴィヨンの妻』が、たちまち売り切れてしまった。／七月二十五日発行の奥付で出た『人間失格』は、ベストセラーになり、二十万部売れた」（和田 二〇一・一七七）^②という。つまり、新聞をはじめとするメディアの報道により、第一次太宰ブームが起こったわけである（滝口 二〇〇九、二〇一六）。しかし、この情死報道をきっかけとする太宰ブームが、どのようなメディア言説により構築されたのかは、まだ明らかにされていない。一方、興味深いことに、第一次太宰ブーム

は一過性のものであり、太宰死後、時の流れとともに沈静化していった（滝口 二〇〇九）⁽³⁾という。

そして、約七十年経った二〇一七年の現在も、我々は「太宰治」という名を聞くことで頭の中に何かしらのイメージを思い描くことができる。たとえば、ネットエイジア株式会社の『「太宰治」に関する調査（太宰治生誕百周年記念調査）⁽⁴⁾』によると、「太宰治」を知っているかという質問を単一回答形式で聞いたところ、約九七％の回答者が「太宰治」を知っていると回答した。また、下記の新聞言説からわかるように、太宰治の代表作『人間失格』の売れ行きも各社ともに好調であり、特に新潮文庫においては累計刊行部数が、文豪・国民的作家夏目漱石の『こころ』と、常に一、二を争う存在である。⁽⁵⁾

新潮文庫では『人間失格』は五百万部を超え、小差ながら漱石の『こころ』を抑えて一位。毎年、新たな読者を開拓している。⁽⁵⁾

累計部数の一位が夏目漱石『こころ』だ。初版の刊行は一九五二年。今年八月に七百万部を突破した。二位が太宰治『人間失格』の六七〇万部、三位がヘミングウェイ『老人と海』の四八九万部、四位が再び漱石で『坊っちゃん』の四二〇万部、

五位にカミュ『異邦人』四一二万部と続く。⁽⁶⁾

このように情死報道をきっかけとする太宰治ブームが沈静化してから、今日における太宰治の認知度や世評のドラスティックな変化のギャップは実に甚だしいものとなった。こうしたギャップはいつ、どのように形成されたのだろうか。太宰文学への再評価、筑摩版太宰全集の発刊や、教科書に『走れメロス』が掲載されたことや、毎年桜桃忌に大勢の人が訪れることなどは、太宰の知名度の向上に寄与したと思われる。また、今日の太宰治の高い評価は、いうまでもなく彼の手で描かれた作品や奥野健男（学友に吉本隆明を持ち、福田恆存に触発され批評をはじめ、後代への太宰受容のマトリクスを作った人物「小澤 二〇〇九」）の評論などに起因する。太宰治の文学的営みは多角的に、幾重にも検討され、テキストの可能性が明らかにされてきた。本研究もまた、そうした研究成果を基礎としている。だが、ここで試みたいのは、太宰治の有名性の要因を太宰その人の営みへと還元するのではなく、太宰について伝えるメディアの力として見出すことである。メディア上で「太宰治」はどのように語られてきたのか、報道過程でメディアはどんな役割を果たしていたのか、またメディアが「太宰治」を語ることとはどのような行為だったのか。

本稿では、新聞を主な分析対象とした。その理由として、まず普

及率の高さ、そして読者層が広範囲であり特定されないことが挙げられる。また長期にわたる調査が可能であるのもその理由の一つである。太宰治が昭和初期から作家活動を開始して、入水自殺したのは戦後の一九四八年であり、ちょうど日本の新聞の発行部数の拡大が順調な時期であった。現在は次第に部数が下落しているが、日本の新聞は戦後長い間、一世帯あたりの発行部数が一部以上という高い普及率を誇ってきたという（藤竹 二〇一二）。毎日新聞社が二〇〇八年に行った第六十二回読書世論調査の中で、「本購入のきっかけ」という項目が設けられていた。「書籍を購入する主なきっかけを三つまで挙げてもらった。最も多かったのは「書店でタイトルや帯、POP（推薦文を書いたミニ広告）を見て」の三九%。次いで「好きな著者」三六%、「新聞などの広告」三五%、「新聞などの書評」二四%、「映画やテレビ」一九%、「家族や友人らの薦め」一九%、「ベストセラーランキング」一六%、「よく読まれている本だから」一四%、「口コミ」一四%、「電車内の中づり広告」四%——と続いた」（二〇〇九・二五）とのことである。この点でも新聞と読書（ないし文学）の深いかわりがかがえよう。

新聞メディアは一九九八年太宰治没後五十年、二〇〇九年太宰治生誕百年も大きく報じている。また、小説家の丸谷才一は、「人魚はア・カペラで歌ふ 検定ばやり」（『オール読物』二〇〇九年五月）の中でこう述べている。「さて、さうしてゐるうちに、新聞で太宰

治検定といふものがあることを知った。／太宰治生誕百年を記念して、六月二十日におこなふ。受験料は一般は三〇〇〇円、高校生以下は一五〇〇円で、テキスト販売の収益と検定実施による収益の一部を『太宰治と叔母きさ（思ひ出）記念館（仮称）』設立の資金の一部に使ふといふ」（二〇〇九・九三・九四）。つまり、新聞は太宰関連情報を取り上げる情報源でもある。

一 文化としての桜桃忌——メディアとの関わりからみて

太宰にまつわる「伝説」の一つに桜桃忌がある。これは太宰治の命日で、俳句の「夏」の季語にもなっている。「太宰治が山崎富栄と玉川上水に入水心中して果てたのは、昭和二十三年（一九四八年）引用者注、六月十三日のことだが、毎年いちど太宰を偲ぶ会をもとうという相談が友人知己のあいだでもちあがったのは、初七日の席あたりからであった」（桂 一九八一・二九）。そこで太宰の死の翌年、一九四九年六月十九日に、第一回の桜桃忌が禅林寺で開かれた。六月十九日に太宰の死体が発見され、奇しくもその日が太宰の三十九歳の誕生日であったことにちなむ。「桜桃忌」の名は、太宰と同郷の津軽の作家今官一によつてつけられた。「桜桃」は太宰の死の直前の名作の題名であり、北国を代表する鮮紅色の宝石のよう

なこの果物は、鮮烈な太宰の生涯と珠玉の短編作家というイメージに最もふさわしいとして、友人たちの圧倒的支持を得たという（桂 一九八一）。

発足当時の桜桃忌は、太宰と直接親交のあった人たちが遺族を招いて、桜桃をつまみながら酒を酌み交わし太宰を偲ぶ会であった。常連の参会者の中には、佐藤春夫、井伏鱒二、亀井勝一郎、檀一雄、野原一夫などがいた。そしていつの間にか、桜桃忌は全国から十代、二十代の若者などが数百人も集まる青春巡礼のメッカへと様変わりしていった。たとえば、「昭和四十一年（一九六六年）の桜桃忌には、男女の若ものたち約五百人がつめかけた。庫裏の座敷には、どんなに無理をしてもせいぜい百三十人くらいしか収容できない。やむをえず定刻前に整理券を配って処理するという苦肉の策をとるに至った。（中略）しかし、あふれた若ものたちは、去りもやらず、会場のまわりに立ちんぼでむらがりひしめいたまま、なかの話を熱心に耳を傾けるのである」（桂 一九八一…六八）という。一人の作家をしのぶために、命日に盛大な催しが行われることは、そもそも不思議なことである。それに加え、さきに述べたように、熱心な参加者が年々増え、多い時期には千人以上が訪れたという。まさに『季節の風物詩』の一つとなっている。

ただし、若者は、なぜ桜桃忌を知り、各地から続々と訪れるようになったのだろうか。原因のひとつは、メディアの広報作用にあった

た可能性がある。と筆者は考える。伊馬春部によれば、桜桃忌が迫ると、マスコミがいつせいにさわいだすのが例年のならわしである⁽⁸⁾。新聞メディアも毎年のように桜桃忌に触れている。「六月二十二日は、夏至。当然のように、各紙に記事や写真が出た。その三日前、十九日は作家、太宰治の命日の桜桃忌。これも毎年、記事になる。時の記念日、父の日、などととともに、著名人の忌日もニュースの対象なのである」⁽⁹⁾。

戦後長期にわたって、新聞メディアは、多くの人々にとって安価で多様な情報を入力するための有力手段のひとつとして機能してきた。そこで、本稿はメディアの役割に焦点を当て、新聞の桜桃忌の語り方と太宰の「神話性」の関係について論じる。『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』の中で桜桃忌がどのように語られていたのか、それは太宰の「神話性」にどのように寄与したのか、またそこにはどんな力学が働いていたのかを究明したい。こうした学際的な研究は、新聞ジャーナリズムの故作家報道の研究と文学領域における作家研究の両方に一定の貢献をなしうと考える。

二 研究方法

研究方法に関して、まず、『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』

のオンラインデータベースを利用して、「桜桃忌」をキーワードに、太宰没後から二〇一四年十二月三十一日までの検索をかけ、出てきたすべての記事は一件ずつその内容を検討し、分析対象を確定した^⑩。このようにして最終的に分析の対象となった記事数は、『朝日新聞』が一七五件、『読売新聞』が一四五件、『毎日新聞』が一〇一件で、合計四二一件である。

以下は、桜桃忌関連記事の一例である（若者の心とらえ「桜桃忌」
『朝日新聞』一九七八年六月二十日朝刊）。

二十三年六月、作家・太宰治が玉川上水に身を投じて自殺してから、ことはちょうど三十年。死んだ翌年から毎年続けられ、三十回を数えた「桜桃忌」が十九日午後、太宰の墓のある三鷹市下連雀四丁目の禅林寺で、若者たちに囲まれて催された。「芥川賞 私に与えてください」との川端康成氏にあてた手紙が話題を呼んだあとだけに、式場の人出もにぎやかだ。

森鷗外の墓の斜め向かいに立つ太宰の墓の前には、色とりどりの花がさざげられた。生前、故人が好んだ酒、ゆかりのサクラランボも。午後三時からの催しなのに、朝、早くも若者たちの姿がちらほら見えた。昼を過ぎると、次々と訪れるヤングで、寺の境内、墓の前はにぎわいを増している。五、六百人はいただろう。ここ数年は若い女性が六、七割を占めたが、今年は男

性の姿が目立つ。男女半々ぐらいた。住職の供養の読経が始まる前から、墓前に花をあげ、水をささげ、合掌する若者たちの列が、細い墓地の小道を埋めて、続いた。順番を待つ間、さかんに「太宰論」をかわしているグループも、あった。

埼玉県入間市の同県立豊岡高の文芸部員の女高生。「私たちはこの秋の文化祭で『太宰治の自殺』をテーマに研究発表をするので、桜桃忌のふん囲気は何としても感じとつてみたかった」。同校文芸部員は十五人全員が来た、という。

東京高専四年、豊川定海君（一八）、「太宰の作品からも、その死からも、うかがえるのは、人生に対する人間的な弱さ。僕も太宰に似ているな、と思うとき、共感と同時に、弱くちやいけないという反発を感じる。とにかく一度、来たかった」。愛知県豊橋市から来たという家事手伝いの娘さん、「去年も来た。太宰の作品は大好き。この時期、ここへ来なくちや、気がすまなくて……」。

「桜桃忌、つて何だろう」という、何でも見てやれ、参加してやれのヤジ馬組もいたようだが、大方が、「太宰文学に純粋な人間性を感じた」「作品を通して感じとれる人間の弱さ、もろさが、本当の人間なのだと思えてしびれる」などの気持ちでファンになった人たちのようだ。「芥川賞 私に……」の手紙についても「太宰らしくて好感が持てる」という感想を、多く

聞いた。

世話人の一人、作家桂英澄さんは「当初の『桜桃忌』は、太宰先生の先輩や友人の、ささやかなつといだった。年々、若者にファンがふえたのは、精神的に飢餓状態のヤングが多く、その飢えを満たそうと『青春の彷徨（ほうこう）』の一つのよりどころとして、太宰作品を見いだした、ということかも知れない」と話す。

墓前の供養のあとは、寺の講堂で、ゆかりの人びとの「偲（しの）ぶ会」。七十人が講堂入りをしたが、屋外にも、中の話を聴き入る人びとの垣（かき）が出来た。

次に、この四二一件の記事をそれぞれテキストデータ化し、計量テキスト分析ソフトKHCoder^①を使い、「桜桃忌」と関連する語句を探索する方法をとる。そして内容分析を行い、新聞メディアの語った桜桃忌の特徴を明らかにし、それらと太宰「神話性」との関係を分析する。本稿の基本的な視点は以下のとおりである。「ジャーナリズムとは、事実に加え価値を伝達する活動である」（McNair, 1998: 32）。そして「ニュース・テキストというのは、まさにテキストから派生する様々な意味、そして価値を伝達している」（大石 二〇〇五：一六五）。

最後に、太宰治の弟子で、桜桃忌世話人の一人であった桂英澄の

『桜桃忌の三十三年』（一九八一年）と雑誌の桜桃忌関連報道を参照しながら、①客観的現実としての「桜桃忌」と、②象徴的現実としての桜桃忌を比較する。言説分析に関する見解を参照しながら、「ファン」という言葉の意味づけを考える。また「社会的現実」の構成という視座から、新聞メディアにはあまり語られてこなかった桜桃忌の一面を明らかにする。その上で、新聞メディアがなぜそのような物語を作ったのかを究明する。

三 全国紙の内容分析

（一）時系列的にみる桜桃忌関連報道

内容分析を行う前に、まず、『朝日新聞』『読売新聞』と『毎日新聞』の初出から、二〇一四年十二月三十一日までの桜桃忌関連報道を時系列的に概観する。

『朝日新聞』のオンラインデータベースで確認できた最初の桜桃忌関連報道は、一九五九年六月十四日付記事「桜桃忌 亀井勝一郎」である。一九五九年から一九六四年までの記事は、亀井勝一郎・臼井吉見ら、生前の太宰治と親交があったり、三鷹桜桃忌の常連であったりする者の太宰治への追憶、桜桃忌の様子の紹介などが主た

る内容であった。一九六五年から一九八二年まで、『朝日新聞』は、三鷹桜桃忌当日の模様やその人気ぶりを中心に報道していた。一九八六年以降、データベースに収録される記事の範囲が拡大し、全文検索ができるようになったため、桜桃忌関連記事の内容も豊富になった。三鷹桜桃忌だけでなく、金木町桜桃忌（一九九九年から、生誕祭と改名された）、山梨桜桃忌、沼津桜桃忌など地域版で見られるようになったが、件数が少ないため今回対象外とした。また、地域版、社会面、総合面、文化面、政治面など、さまざまな紙面に桜桃忌に関する言説が広がっていき、記事の主題が桜桃忌とは無関係であっても、桜桃忌への言及があつた記事が多数見受けられる。その代わりに三鷹桜桃忌当日の様子を中心に詳しく報道する記事が少なくなっている。

『読売新聞』のオンラインデータベースで確認できた最初の桜桃忌関連報道は、一九四九年六月二十日付記事「いずみ」である。一九五〇年の桜桃忌を『読売新聞』も報じた。桂英澄（一九八一・三八）によれば「太宰治の葬式は、異常な死をとげた流行作家へのセンセーショナルな世間の目もあつて、文壇、ジャーナリズムからの参列者も多く、きわめて盛大であつた。桜桃忌も最初の一、二回は、その余波を反映して、それなりに盛大であつた。だが、三回目ごろから参会者の数もぐつと減り、五、六回ごろになると人数も三、四十人、顔ぶれもほぼ固定してきている」という。そのため

か、『読売新聞』は三回目から桜桃忌の報道を中止した。しかし一九六〇年から、また毎年のように桜桃忌に触れるようになった。

『毎日新聞』のオンラインデータベースで確認できた最初の桜桃忌関連報道は、一九五二年六月十九日付記事「太宰治の五年忌」である。その後桜桃忌の報道をいったん中止した。再開した一九六二年から一九八六年までの記事は、ほとんど「芸術・芸能 文学」面で、三鷹桜桃忌当日の様子報道を中心としていた。一九九〇年以降の桜桃忌関連報道は、『朝日新聞』とはほぼ同じ傾向を見せている。

以上のとおり、桜桃忌関連報道を時系列的に概観すると、『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』が桜桃忌の報道を始めた、あるいは再開したのは、六〇年代前後であることがわかる。桂英澄（一九八一・四四）によれば、「若い人たちがとみにふえて、桜桃忌がいちじろしい変貌を見せはじめたのは、昭和三十二年、三年（それぞれ一九五七年、一九五八年）頃からである。／会場である庫裏の桜かかくにただずんで、なかのスピーチに聞き耳をたてている若ものの姿を見かけるようになった」。つまり、若い人が桜桃忌に現れから、三紙は、そこにニュース・バリューを見出し、桜桃忌に関する報道を始めた可能性が高いのではないか。

（二）テキスト分析

次に、前節で述べた方法で内容分析を行った結果を以下に示す。

表一 「桜桃忌」と関連する語句 朝日新聞・読売新聞・毎日新聞

	朝日新聞		読売新聞		毎日新聞	
	抽出語	Jaccrd	抽出語	Jaccrd	抽出語	Jaccrd
1	太宰治	0.2844	太宰治	0.3821	太宰治	0.4194
2	禅林寺	0.2353	禅林寺	0.3738	禅林寺	0.3433
3	三鷹	0.2094	三鷹	0.3496	作家	0.3354
4	太宰	0.1985	十九日	0.3364	三鷹	0.3220
5	ファン	0.1776	太宰	0.2300	太宰	0.3105
6	6月	0.1552	ファン	0.2120	ファン	0.2260
7	作家	0.1514	作家	0.2065	十九日	0.2248
8	十九日	0.1504	玉川上水	0.1991	東京	0.2215
9	遺体	0.1500	東京	0.1743	行う	0.2158
10	開く	0.1424	墓前	0.1718	玉川上水	0.2000
11	玉川上水	0.1354	行う	0.1570	文学	0.1943
12	毎年	0.1269	今年	0.1511	6月	0.1849
13	今年	0.1246	入水	0.1472	命日	0.1742
14	東京	0.1199	文学	0.1377	作品	0.1638
15	文学	0.1163	下連雀	0.1333	遺体	0.1504

* Jaccrd はその関連の強さを示す係数。

「命日」に「禅林寺」で「行う」「桜桃忌」

共通点として、まず「作家」「太宰治」と「桜桃忌」の強い関連性が、『朝日新聞』『読売新聞』と『毎日新聞』から、ともに垣間見られる。また、表一から次のことも予測される。「桜桃忌」は、毎年「太宰治」の「命日」にあたる「六月」「十九日」に「東京」「三鷹」「禅林寺」で「行」われて・「開」かれている。「昭和二十三年、三十九年の短い生涯を閉じた太宰治の人と文学をしのぶ「桜桃忌」

が命日の十九日三鷹市の禅林寺で行なわれた。」⁽¹²⁾、「六月十九日は小説家・太宰治の命日「桜桃忌」。太宰をしのび、東京・三鷹の禅林寺には毎年、多くの人が集まる。」⁽¹³⁾などの言説が、桜桃忌関連記事の中に頻出する。それにより、読者が、まず「桜桃忌」が太宰治の「命日」であり、毎年「六月」に「東京」「三鷹」「禅林寺」で「行」われて・「開」かれているという知識を得、あるいは再確認する。ここで新聞は広報媒体として機能している。

また、こうした情報が六月に多く出てくる。『朝日新聞』では、六月の記事が桜桃忌関連記事全体の約六三%、『読売新聞』では、約七四%、『毎日新聞』では、約七一%を占めている。このように、六月に集中的に記事が出てくると、短期間で購読者の関心を引き、強く印象つけることができる。掲載面別にみても、社会面、総合面、文化面、政治面、特集など、さまざまな紙面に桜桃忌に関する言説が広がっている。

すでに述べたように、一人の作家をしのぶ命日に盛大な催しが行われることは、そもそも不思議なことである。それに加え、新聞メディアがほとんど毎年のようにそれを取り上げて報道してもいる。たとえば「天声人語」のような、主題が桜桃忌とは無関係の記事であっても、つぎのように言及することがある。

ところで、富士山を、裾野の広さの割に低いと言ったのは、

さすが桜桃忌の太宰治だった。もう一・五倍は高くなくてはいけないと名短編「富嶽百景」に書いた。もしそうならアフリカ最高峰キリマンジャロなみの高さでそびえる。文豪が誘う楽しい想像である。¹⁴

また、一部の人が知っているように、同じ「三鷹」の「禪林寺」にはもう一人の文豪森鷗外の墓もあり、太宰治の墓と斜めに向かい合っている。そのためか、桜桃忌関連記事の中には、森鷗外のこともしも触れられている。「昨年より百人もふえ白百合や菊の花が供えられた墓のまわりをぐるつとりまき、真向かいにある森鷗外の墓石がみえないほど。」¹⁵とあるように、文豪森鷗外の墓の寂しさとは対照的な、桜桃忌の際の太宰治の人気ぶりが強調されている。

心中と関連付けられる「桜桃忌」

「玉川上水」、「入水」、「遺体」という名詞が、表一に出現したことは、三紙が「桜桃忌」に関する報道を行う際に、ともによく太宰治の「玉川上水」での入水自殺に触れていることにほかならない。たとえば、下記のような言説が散見される。

今年の「桜桃忌」は四十四回目。一九四八年のこの日、太宰と愛人・山崎富栄さんの遺体が、東京・三鷹の玉川上水で、発

見された。二人の死はその後、情死説や無理心中説など様々に論じられてきた。¹⁶

周知のとおり、太宰治は、戦争未亡人の山崎富栄とともに「玉川上水」で入水し、亡くなった。川崎が指摘するように、二人が行方不明になった一九四八年の六月十三日から、新聞では連日その失踪が大きく取り上げられ、多くの人々の関心を集めた。そして葬儀が終わり、七月に入り、舞台は雑誌に移る。週刊誌や文芸雑誌などが追いかけるようになり、その情死のあり方は是非について議論したという（川崎 二〇〇五）。それについて、川崎は、ジャーナリズムの視点から批判的に捉えている。

桜桃忌関連報道における太宰治「玉川上水」「入水」心中への言及は、情死報道の延長線にある報道とみなしてもよからう。もちろん、命日に太宰治をしのぶ「桜桃忌」ではあるものの、それに関する報道の中で太宰治の情死に触れる必要はどれほどあるのかと、筆者はまず疑問に思う。

一方、前述したように、川崎（二〇〇五）の情死報道調査によると、ジャーナリスティックな意味合いにおける作家・太宰治に関する認知度は、情死報道をさかんに飛躍的に広がつていた。つまり、情死報道をきっかけとして太宰治の名は、文化消費者である大衆に広くゆきわたり、第一次太宰ブームが生まれたのである。¹⁸となると、

後年の情死報道の延長線上の太宰治「玉川上水」入水心中への言及も、新聞購読者の好奇心をあおったものであると考えられる。

「受容史として、批評家・研究者を含め読者に受容され消費される過程で、情死報道が太宰文学の声価をある程度方向づけたり、なにがしかはたらかけたことを無視はできない。とりわけ現在の読者にとっては、太宰治情死報道を洗い直すことは、太宰研究における脱神話化もしくは歴史的相対化の一環として、興味深い仕事である」(川崎 二〇〇五・一一四)と、川崎は指摘しているが、それを逆手に取れば、桜桃忌関連報道の中で太宰「玉川上水」「入水」心中への言及は、いまだに太宰の「神話性」を織り成しているともいえるだろう。

大勢の女性「ファン」が訪れる「桜桃忌」

「ファン」という言葉は、表一の中で非常に突出している。このことが示唆するのは、桜桃忌関連報道の中で、桜桃忌に訪れる太宰「ファン」のことがニュース・バリューのあるものとして報道されていることである。特に三鷹桜桃忌当日の模様を報道する記事の中では、太宰「ファン」への言及が多かった。それでは、記事の中で三鷹「桜桃忌」の太宰「ファン」はどのように語られていたのだろうか。一件ずつ記事を確認したところ、『朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』の中で、三鷹「桜桃忌」に参加した太宰「ファン」に

ついて言及した記事が、それぞれ、三十五件、四十七件、二十九件あった。

まず、年齢層からみれば、「故人と交際の深かった評論家亀井勝一郎、作家壇一雄両氏らに若い太宰ファンら約二百人が集まった」⁽¹⁹⁾とあるように、特に『読売新聞』『毎日新聞』では、若者が多いと、報道されている(「ファン」に言及する記事全体の約四九%、四八%を占めている)。このような報道は、「青春の文学」「本好きなら誰もが一度は通る道、青春のはしか」など、世の中に流通する太宰神話を助長する。

次に、性別からみると、「ことしも若い女性ファンら六百人が集まり、太宰をしのび、熱っぽく太宰文学を論じていた」⁽²¹⁾、「ファンの大半は若い女性で、墓前に列を作り、太宰の好物だった酒やたばこを供えていた」⁽²²⁾とあるように、女性ファンが愛する男性作家という構図が、特に『読売新聞』と『毎日新聞』の報道から見て取れる(「ファン」に言及する記事全体の約四七%、三五%を占めている)。周知のとおり、太宰は、二度にわたる結婚、カフエの女給田部シメ子との心中未遂事件、山崎富栄との情死など、数々の女性とかかわりながら、波乱に富んだ人生を送った。こうした多くの女性に愛されるという理想化された太宰治の幻影は、桜桃忌関連報道の中で女性ファンを強調することにより、いっそう強化されていく。

また、「桜桃忌にファン千人」⁽²³⁾という見出しのように、数字を

もつて、または「大勢」、「多く」といった言葉でファンの数の多さを、または「墓前には、未亡人の津島美知子さんをはじめ、生前ゆかりの深い作家檀一雄、伊馬春部氏らが並び雨の中に静かな読経の声が流れたが、墓地は約五百人の「ファン」のカサでいっぱい。朝六時ごろから新潟県や群馬県から上京してきた人、学生たち、このうち女性が七割近くもしめ、近ごろの「太宰ブーム」を見せていた²⁴」とあるように、「早朝」から「全国」から「駆けつけた」「つめかけた」といった言葉で、ファンの熱狂ぶりを強調する記事も、それぞれ、約八〇%、八九%、九三%を占めている。

前述の調査からわかるように、若い人が桜桃忌に現れてから、三紙は、そこにニュース・バリューを見出し、桜桃忌に関する報道を始めた、あるいは再開した可能性が高いと考えられる。その後、新聞は、ほとんど毎年のように桜桃忌のことに触れ、関連記事の中で、「作家」「太宰治」の「命日」「六月」「十九日」に「東京」「三鷹」「禅林寺」で「行う」「開く」「桜桃忌」、「玉川上水」での「入水」心中と関連付けられる「桜桃忌」、大勢の熱烈な若い・女性「ファン」が訪れる「桜桃忌」像を広報した。推測の域を出ないとはいえず、この報道により、魅力的な太宰治と桜桃忌のことが伝わり、情報が広がったのではないだろうか。これが要因となつて、桜桃忌の参加者はますます増えていったのではないだろうか。そして、逆に新聞メディアの桜桃忌報道を促すに至った。そのような「社会的出来事

—ニュース—社会レベルでの認知・態度・行動—社会的出来事」の循環の中で、太宰治の「神話性」が織り成されてきたと思われる。

四 新聞メディアの「現実」の編集

(一)『桜桃忌の三十三年』との比較からみて

カリスマに群がる「ファン」

前節で見てきたように、「若い太宰ファンら約二百人が集まった²⁵」「太宰文学の熱烈なファンの男女大学生、高校生らがつぎつぎと参拝、季節の花をたむけた」など、新聞メディアにおいて、桜桃忌に訪れた者を「ファン」と呼ぶ言説が非常に目立つ。

一方、桂英澄は、「昭和四十一年〔一九六六年〕の桜桃忌には、男女の若ものたち約五百人がつめかけた」(一九八一…六八)など、終始、桜桃忌に訪れた者を「青年」や「若者」などと呼び、「ファン」という言葉は使わなかった。

新聞メディアが桜桃忌参加者を「ファン」と呼ぶことが、意味するのは何か。周知のとおり、言葉による名づけ行為には、必然的にある種の権力作用が伴う。人々の認識や思考が制約され、一定の方向に導かれるのである。そして、新聞メディアが参加者を「ファ

ン」と名づけることも、同様のフレーミング効果があると考えられる。⁽²⁷⁾

それでは、桜桃忌参加者を「ファン」と呼ぶことで、新聞購読者の認識にどんな影響を与えるのだろうか。桜桃忌関連報道の中で、桜桃忌参加者を「ファン」と呼び、そしてその熱狂ぶりを大いに宣伝する言説により、購読者は、応援・愛好の対象である太宰治に対して、カリスマ的な魅力を発するスター作家としての「太宰治」を想起しやすいと考えられる。石田佐恵子によれば、「日常的に用いられる「カリスマ」という言葉は、「何らかの特別な才能を持つがゆえに、特別に他者を惹きつける個人」を指す場合が多いというわけである」(石田 一九九八・五四)という。本稿でいう「カリスマ」は、まさにこの通俗的な用法である。

実は、新聞メディアの桜桃忌関連報道の中で、下記のように、実際に「カリスマ」や「スター」という非常に人の心をあおる言葉で太宰治を評価する言説もみられる。

六月十九日は小説家・太宰治の命日「桜桃忌」。太宰をしのび、東京・三鷹の禅林寺には毎年、多くの人が集まる。時を超えてなお、読者を惹きつけ、読み継がれ、関心を持たれるカリスマ性。太宰に動かされている人々がいた。⁽²⁸⁾

太宰は青森の資産家の息子で、三十九年の生涯しょうがいを駆け抜けた文学界のスーパースター⁽²⁹⁾。

ここで、新聞メディアが、桜桃忌を単に伝え、描写する、透明な媒体などではなく、参加者を「ファン」と位置づけることで、「カリスマ的スター作家太宰治」というフレーミング効果を持つ空間としても、機能していることが確認できよう。

桜桃忌参加者のもうひとつの顔

ところが、桂英澄の『桜桃忌の三十三年』には、新聞メディアがほとんど語らなかつた桜桃忌参加者のもうひとつの顔が見られる。

「どうぞ遠慮なくお飲み下さい」と亀井氏が声をかけると、大舟に乗った気で茶碗酒のピッチをあげた男の学生たちには、すっかり酔いがまわつてやたらに議論を吹きかけ、しつこくからむものもある。(中略) 酔つて取っ組みあつて襖を破つた若ものがいて(後略)。(桂 一九八一・五〇～五二)

桜桃忌も騒々しい一時期を経験しているのだが、(中略) また、ある年、一人の青年が立ち上がった、
「太宰治は、共産党についてどう思っていたのか？」

という質問を發した。すると別の青年がすぐ立ち上がり、桜桃忌をそつちのけにして論争をはじめた。後で訊くと、全学連の主流派と反主流派で、桜桃忌をぶつつぶせといつて押しかけたのだが、内輪もめをはじめたものらしかった。(桂一九八一・五二～五四)

青年たちのなかには、桜桃忌を否定し嫌悪するような発言をするものが、かならずしも珍しくない。

五十一年(一九七六年)の桜桃忌のときのことだが、

「こういう会に集まるようなものは志が低い」

とつぜん、そう言い出した青年がいた。

「故人の思い出なんか聞いても、文学の理解には、なんの役にもたたない」

桜桃忌への反撥を、ひとり敢然と表明するふうだが、

「役立たないと思うなら来なけりやいいじゃないか」

「志が低いとはなんだ。お前は高いのか」

たちまち周囲から袋叩きにあつて、けつきよく要領を得ず、半泣きのように立ち往生してしまつた。(桂一九八一・一二三～一二四)

すなわち、実際の桜桃忌参加者には、政治的な動機をもつた学生

活動家や桜桃忌に反発を覚えた者もいたのである。しかし三節のテキスト分析からわかるように、新聞メディアが語つたのはほとんど敬虔で誠実な太宰信者であつた。報道の量からみても、一九四九年から一九八〇年までの間、三紙の中で、『桜桃忌の三十三年』からわかつたもうひとつの顔を持つ参加者について言及した記事は、たつた一件しかなかったのである。ここには、複雑な「現実」を、単純な物語につくりかえてしまふ、新聞という情報メディアの編集力が見て取れる。

(二) 雑誌の桜桃忌関連記事との比較からみて

雑誌の桜桃忌関連記事の中に、以下のように「太宰治のファンの集いはごくライト化されていた」(『散歩の達人』二〇〇六年八月)という記事がある。これは、神田ばんという執筆者の個人的な視点から桜桃忌に参加した感想であつた。

そうこうするうちお坊さんが現れ読経が始まつた。かと思つたら、五分も経たぬうちに終わつた。へっ。こんだけ?? もつと「ファンの集い」みたいな熱いものを想像してたのに、拍子抜けた。

(中略)

第五十九回桜桃忌はあつさり終了した。あまりのライト化で、

私のように文学的桜桃忌を期待していた人はがっかりしたのでは？

神田は、初めて桜桃忌に参加したのだろう。あまりの期待に、かえってがっかりした。しかし、神田のこのような期待、「ファンの集い」のような熱いものへの想像はどこから生まれたのだろうか。魅力的な桜桃忌について宣伝する新聞などのメディアからきたのではないだろうか。

同じく二〇〇六年の新聞メディアの桜桃忌報道を概観する。

十九日は作家、太宰治の命日「桜桃忌」。太宰が眠る三鷹市の禅林寺には今年も大勢のファンが訪れ、色とりどりの生花やサクランボが供えられた墓前で手を合わせた。

読経の際には、百人以上が集まり、太宰をしのんだ。大学時代に太宰作品に接した中野区の佐藤哲彦さん（三六）は、今回初めて参加した。昨秋、会社を辞めた際、思い立って太宰ゆかりの青森、甲府などを旅して歩いた。「暗い話でも、どこかふざけたところがあるのが魅力」だという。好きな作品は「畜犬談」。

太宰が好きだった「ゴールデンバット」を軽くくゆらすと、そのまま墓前に供え、合掌した^⑩。

相変わらず、魅力的で、大勢の敬虔なファンが訪れる桜桃忌を報道している。神田のこの記事により、「桜桃忌」という表象が新聞メディアではあるステレオタイプで表現されてきたことが明らかにになった。そして桜桃忌に足を運んだことのない多くの人がそのイメージを通して「桜桃忌」を認識し、内面化している。同じ桜桃忌であるものの、雑誌に掲載された神田の感想と食い違う、上述の新聞報道における「桜桃忌」のステレオタイプイメージは、後述するが太宰治の神話性を保つためと考えられる。

五 新聞メディアの桜桃忌報道と太宰神話のポリティクス

それでは、様々な参加者がいたにもかかわらず、新聞メディアで語られたのは、ほとんど敬虔で誠実な太宰信者であったのは、なぜだろうか。そしてなぜ三節の分析で明らかになった内容のように物語が作られていったのだろうか。そこにはどんな力学が働いていたのだろうか。まず、三節で示したように、大勢の若い人が桜桃忌に現れ、社会現象となったことに、三紙がニュース・バリューを見出し、桜桃忌に関する報道の契機となった。当時、一九六〇年前後は、色川大吉の著書『若者が主役だったころ——わが六十年代』（二〇〇八年）のタイトルにあるように、若者たちが歴史の前面に顔

を出して主役を演じていた時期であった。六〇年代における若者は、それだけで新聞にとつて報道価値のある対象であつたと考えられる。敬虔な太宰信者がニュースの物語とちようど適合したのが原因のひとつと思われる。

そして、最も重要な原因は、社会の公共機関という新聞メディアの性質にあると考えられる。文学作品を創つた作家（没後）に関する新聞の報道態度は次のようにまとめられる。まず、無名である作家は、通常、新聞メディアにより取り上げられることがない、もしくは少ない。つまり、作家は「沈黙の空間」に位置する^⑩。この空間において、新聞ジャーナリストは無名の作家を無視している。次に、没後、新聞メディアに常に露出される作家は、文学史に一定の地位を占め、文学研究者、評論家などにより高く評価されている者がほとんどである。この場合、作家は「合意の空間」に位置する。この空間における新聞ジャーナリストの役割は、作家の神話性を支持し、称賛することにある。そして、作家の神話性を揺がす言説は、新聞ジャーナリストにより、公的な場から排除される。また、無名であつたが、様々なきっかけで作品が見直され、再評価される作家もいる。ただし、この場合には、普通、新聞ジャーナリズムにおける正当な論争があまり見られない。作家は、再評価され、メディアにより取り上げられるようになったときに、直接「沈黙の空間」から「合意の空間」に入るケースが多い。そして、いったん作家が高く

評価され、作品がカノンとなつた後、作家の「神話性」への疑義は、通常新聞ジャーナリズムによつて公的な場から排除される。もつとも、生前無名であつたが、メディアの力を借りて「有名」になつた作家もいる。たとえば、「生前は一介の地方詩人に過ぎなかつた賢治が、さまざまなメディアに乗つて国民的な偉人へと変貌していくその宣伝・認知の過程を追跡した」（二〇〇三・八）米村は、宮沢賢治没後の一九三三年から賢治の伝記が教科書に掲載される一九五一年を目安に、十数年間『岩手日報』に掲載された賢治関係記事が二五〇点を超えることを指摘し、『岩手日報』が無名だつた賢治の紹介役として、特に賢治全集販売促進において果たした役割を明らかにした。

太宰治の場合、少々複雑である。滝口（二〇〇九、二〇一六）によると、一九四八年の情死報道で第一次太宰ブームが起こつたわけであるが、それは一過性のものであり、太宰死後、時の流れとともに沈静化していったという。それに呼応して、『読売新聞』は第一回と第二回桜桃忌、『毎日新聞』は第四回桜桃忌について報道した。情死報道の余波か、この時期の関連記事の中で、太宰が「合意の空間」に入つた後にはあまりみられない美知子夫人や太宰の長女園子への言及が目立つ。その後、ブームが沈静化するにつれて、桜桃忌関連報道も見られなくなつていった。つまり、このことから太宰は新聞メディアから無視されていた時期であると考えられる。

しかし、一九五五年から筑摩書房版の『太宰治全集』が刊行されると、第二次の太宰ブームと呼べるようなものが起こったという（滝口 二〇〇九）。また、教科書図書館「東書文庫」のデータベースと『教科書掲載作品 小・中学校編』『教科書掲載作品13000』を確認したところ、太宰作品で中学校教科書に最初に採用されたのが一九五六年の「走れメロス」（「国語総合編 中学校二年上」中教出版）である。その後、一九六五年までに通算で八社十二種の教科書に採録された（付録一参照）。高校教科書に最初に採用されたのは一九五七年の「走れメロス」（「国語二」「近代の小説」秀英出版）で、一九六五年までに「富嶽百景」などを含め、通算で八社十四種の教科書に採録されている。そして、一九六三年に『國文學——解釈と教材の研究』四月号による初めての太宰治特集号「太宰治における人間と風土」も組まれた時期、つまり六〇年代前後から太宰治は文学史に一定の地位を占める存在となり、「合意の空間」に入つたといえる。この空間において、新聞ジャーナリストの役割は合意された価値＝太宰の「神話性」を支持し、賞賛することにあつた。そして太宰の「神話性」を揺るがす言説が通常新聞ジャーナリズムによつて公的な場から排除されたのである⁽³²⁾。

このように、桜桃忌関連記事の中で、太宰の「神話性」に都合の悪い社会的事象が無視、あるいは排除される一方で、新聞メディアによつて大いに語られたのは、太宰「神話性」の生成と発展に有利

な（ア）「作家」「太宰治」の「命日」「六月」「十九日」に「東京」「三鷹」「禅林寺」で「行う」・「開く」「桜桃忌」、（イ）「玉川上水」での「入水」心中と関連付けられる「桜桃忌」、（ウ）大勢の熱烈な若い・女性「ファン」が訪れる「桜桃忌」なわけである。一方、雑誌は、公共機関ではないため、「太宰治のファンの集いはごくライト化されていた」という記事の掲載が可能である。新聞では書けないこと、あるいはセンセーショナルなものを書くことも許容される。「桜桃忌の三十三年」も同様である。

なお、太宰治の「有名人」に教科書が与える影響も大きいと思われる。付録一の示すとおり、「走れメロス」は六〇年代から中学校教科書の定番教材となつて現在に至っている。「走れメロス」以外に、「富嶽百景」「津軽」なども高校教科書に採録されてきた。そのため、前述のネットエイジア株式会社の『「太宰治」に関する調査（太宰治生誕百周年記念調査）』では、「太宰治」の作品を読んだことがあると回答した三四二人に、どの作品を読んだことがあるかを複数回答形式で聞いたところ、約九二％が「走れメロス」を読んだと回答したわけである。つまり太宰治の「有名人」には教科書との関係も多大である。それについては、今後、別稿を著す予定である。

注

- (1) 川崎賢子によると、二〇〇四年八月現在で、占領期雑誌記事情報データベース（現二十世紀メディア情報データベース）で検索をこころみるなら、一九四五年から一九五〇年までの間に、記事タイトル「太宰」でヒットするもの（記事タイトル・小見出し等に「太宰」を含むもの）は四一六件、うち「太宰府」「太宰春台」ほか太宰治関連ではない記事を除くと三九五件あるが、そのうち生前の太宰に関する記事は五十二件に過ぎないという。また、時代の寵児、「斜陽」族を流行語にしたと伝えられながらも、全資料中「斜陽」でヒットする記事数が六十四件あるうち、太宰生前に「斜陽」の検索で該当する関連記事は十二件、「斜陽族」は生前にはゼロ、死後に一件のみであるという。さらに戦後文学者の間でもとくに「無頼派」として鳴らしたと現在では評されるのが常だが、その「無頼派」というキーワードも、太宰生前に限定して検索するなら、ヒットする記事は皆無であるという。
- (2) 上述は、滝口明祥（二〇〇九、二〇一六）により既に指摘されている。
- (3) 滝口によると、毎日新聞の読書世論調査の中で、「よいと思つた本」という質問項目では、一九四九年には『斜陽』が十一位であり、『人間失格』は上位二十位からは外れている。そして一九五〇年には『斜陽』も外れ、以降は太宰作品が一作も入っていない状態が何年も続くことになるという。また「好きな著者」という一九四九年から設けられた質問項目では、一九四九年に二十位（十九人）に入っただけで、一九五〇年以降、一九五九年に三十四位（二十二人）に入るまで太宰の名は見当たらないのであるという。
- (4) 調査概要（クローズド調査）○調査対象……十五歳～五十九歳のケータイユーザー ○調査地域……全国 ○調査期間……六月九日～六月十日 ○回答サンプル数……五五三名（回答者キャリア内訳…NTTドコモ六〇・九％、au二九・五％、ソフトバンク九・六％）性別…男性
- 四九・二％、女性五〇・八％ ○調査方法……モバイルリサーチ（三キャリア）。ネットエイジアリサーチ「太宰治」に関する調査（太宰治生誕100周年記念調査）「太宰が好き」10代女性54％」（http://www.mobile-research.jp/investigation/research_date_090612.html）参照。
- (5) 「没後五十年・太宰治の世界」（上）苦悩？演技？揺れる「読み」（連載）『読売新聞』一九九八年六月八日夕刊。
- (6) 「夏目漱石」こころ『二〇一六』『朝日新聞』二〇一四年九月十九日朝刊。
- (7) 日本新聞協会「日本新聞年鑑」のデータによると、新聞の発行部数は、一九四八年に一九三四万部（朝夕刊計、以下同）、一九五六年に二三四万部、一九六五年に二九七八万部、一九九九年に五三七六万部まで伸びた。新聞は、これまでラジオ（一九二五年放送開始）、テレビ（一九五三年放送開始）といった他のマスメディアの登場・普及があつても、発行部数はまったく影響を受けることはなく、むしろ増加していった（橋元 二〇一一）。一九九七年をピークとして発行部数は低下傾向にあるが、二〇一五年にはまだ四四二五万部の発行部数を有する大きなメディアである。
- (8) 「十九年目の桜桃忌 太宰治に語る 鎮魂のドラマ／伊馬春部」『読売新聞』一九六七年六月十七日夕刊。
- (9) 「美空ひばりしてるマスコミの悼み方（先週今週・社会）」『AERA』一九九〇年七月三日。
- (10) ただ、桜桃忌に関する記事であつても、数件の短い情報をまとめて伝える形式の「週末情報」や、「ふるさと発」などは分析対象から除外した。また桜桃忌ということはが季語として現れる俳句や和歌をまとめたもの、記事数が少ない山梨桜桃忌をはじめとする三鷹桜桃忌以外の桜桃忌は、すべて分析から除外した。
- (11) 樋口耕一により開発された計量テキスト分析のためのフリーソフト。詳細はKHCoderウェブサイト（<http://khs.sourceforge.net/>）参照。
- (12) 「太宰文学」しのぶ桜桃忌『毎日新聞』一九六三年六月二十日朝刊。

- (13) 「太宰の魅力、時を超え ゆかりの三鷹で朗読・演劇」『朝日新聞』二〇〇六年六月十四日夕刊。
- (14) 「(天声人語) 富士の「弾丸登山」」『朝日新聞』二〇一三年六月十八日朝刊。
- (15) 「太宰ファンで埋まった『桜桃忌』」『毎日新聞』一九六七年六月二十日朝刊。
- (16) 「44回目の『桜桃忌』 苦悩の生見つめる フジ系で六月十九日放送」『朝日新聞』一九九二年五月二十五日夕刊。
- (17) 川崎によれば、「情死報道は、文学者の枠を超え、太宰治の愛読者という枠をも超えるひろがりを持ち、その論調はたいへん素朴に情死事件を太宰文学の価値評価と結びつけたり、テキストのなかに死の動機を探ったり、情死を根拠としてテキストを分析・解説したりしがちであった」(二〇〇五・一三二) という。
- (18) たとえば、延田敬一郎は『文学草紙』(一九四八年八月) の中で以下のよう記している。「太宰の死が、新聞に発表されてから、この小さな町の小屋でも、にわかには太宰の小説集や、太宰の文章が載つてゐる雑誌が売れた。三十冊ほど残つてゐた展望の六月号がまたたく間に売れた。五冊ほど残つてゐた彼の全集の第一回配本の分が、もう、今日はない」という。
- (19) 『太宰文学』しのぶ桜桃忌』『毎日新聞』一九六三年六月二十日朝刊。
- (20) 例えば、安藤宏は、太宰文学に関して、「青春のはしか」という言い方も用いられる。青春時代に誰でも一度は太宰を通過しなければならぬが、いつまでも読んでゐるのは未成熟なのである」(二〇〇二・二二二) と述べている。それに続き、「ただしこの場合もそれを苦々しげに語る人は、かつて熱狂的な太宰の読者であつたケースが多い。当時の自分を若気の至りであつたと反省し、太宰への幻滅を語ることをもつて、成熟した読書人のあかしとするような風潮もそこから生まれてきた。そうした皮肉も含めて、永遠の『青春の文学』などと揶揄されることもある」(二〇〇二・二二二・二二三) と認めつつも、「こうした中で、『人間失格』は隠れたベストセラー

として着実に読み継がれてきている。もしも半世紀以上にわたつて「幻滅」が強調され続けているのであるとするなら、実はそのこと自体が驚異的な事実なのではあるまいか」(二〇〇二・二二三) と指摘している。

- (21) 「桜桃忌、ことしも六百人 若者の心離さない太宰治」『毎日新聞』一九七四年六月二十四日夕刊。
- (22) 「「おあしす」 桜桃忌にぎわう」『読売新聞』一九八七年六月二十日朝刊。
- (23) 「桜桃忌にファン千人」『朝日新聞』一九八二年六月二十日朝刊。
- (24) 「雨の『桜桃忌』 太宰治のんで五百人」『読売新聞』一九六五年六月二十日朝刊。
- (25) 『太宰文学』しのぶ桜桃忌』『毎日新聞』一九六三年六月二十日朝刊。
- (26) 「桜桃忌、朝からファンぞくぞく」『毎日新聞』一九六六年六月二十日付記事朝刊。
- (27) 大石裕によると、「国家社会の構成員としての国民は、マス・メディアによつて報道される社会的出来事に直接に参加せず、関わらない場合でも、日常的にジャーナリズムが行う社会的出来事の「名づけ」の影響を強く受けている」(二〇〇五・一八三) という。出来事ではないが、参加者を「ファン」と名づけることにしても例外ではないだろう。
- (28) 「太宰の魅力、時を超え ゆかりの三鷹で朗読・演劇」『朝日新聞』二〇〇六年六月十四日夕刊。
- (29) 「(窓・論説委員会から)「百歳」の人気作家」『朝日新聞』二〇〇九年二月十七日夕刊。
- (30) 「太宰治への思い様々『桜桃忌』 三鷹・禅林寺に大勢のファン／東京都」『朝日新聞』二〇〇六年六月二十日朝刊。
- (31) ここで用いる「沈黙の空間」「合意の空間」の枠組は、ベトナム戦争時のジャーナリズムの社会的影響を示したハリン (Hallin 1989) の図式「合意、正当な論争、逸脱の空間構成」を参照した。
- (32) 東書文庫 東京書籍附設教科書図書館ホームページ (<http://www.tosho>)

-junkie.jp)。二〇一七年七月二十日にアクセス。

- (33) 太宰治が「合意の空間」に入る以前の桜桃忌関連記事は、非常に少ない。主に情死報道の余波による四件の報道である。そのため、三節の桜桃忌関連記事分析は、一九四九年からのものであるが、そこには主に「合意の空間」に入った後の傾向が見られる。

参考文献

- 浅岡隆裕 (二〇一三) 『メディア表象の文化社会学——〈昭和〉イメージの生成と定着の研究』ハーベスト社。
- 安藤宏 (二〇〇二) 『太宰治——弱さを演じるということ』筑摩書房。
- 阿武泉監修 (二〇〇八) 『教科書掲載作品13000』日外アソシエーツ。
- Hallin, D. C. (1989) *The "Uncensored War": The Media and Vietnam*. Berkeley: University of California Press.
- 橋元良明 (二〇一三) 『メディアと日本人——変わりゆく日常』岩波書店。
- 細谷博 (二〇〇九) 「松本和也著『昭和十年前後の太宰治（青年）・メディア・テキスト』『日本文学』五八号・八六～八八頁。
- 樋口耕一 (二〇一四) 『社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版。
- 藤竹暁 (二〇一三) 『図説日本のメディア』NHK出版。
- 色川大吉 (二〇〇八) 『若者が主役だったころ——わが六十年代』岩波書店。
- 石田あゆみ (二〇〇六) 『ミッチー・ブーム』文藝春秋。
- 石田佐恵子 (一九九八) 『有名人という文化装置』勁草書房。
- 桂英澄 (一九八一) 『桜桃忌の三十三年』未来工房。
- 川崎賢子 (二〇〇五) 「太宰治の情死報道——ブランゲ文庫資料とその周辺から」、山本武利編『新聞・雑誌・出版』叢書 現代のメディアとジャーナリズム 第五巻、ミネルヴァ書房。

川竹和夫 (一九八八) 『ニッポンのイメージ——マスメディアの効果』日本放送出版協会。

毎日新聞社編 (二〇〇九) 『二〇〇九年版 読書世論調査』毎日新聞社。

松本和也 (二〇〇九) 『昭和十年前後の太宰治（青年）・メディア・テキスト』ひつじ書房。

松井豊編 (一九九四) 『ファンとブームの社会心理』東京サイエンス社。

McNair, B. (1998) *The Sociology of Journalism*. London: Arnold.

大石裕 (二〇〇五) 『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房。

小澤純 (二〇〇九) 「アイコンとアイコン——太宰治と〈現代文学〉試行」、斎藤理生・松本和也編『新世紀太宰治』双文社出版。

佐伯順子 (二〇一三) 『明治（美人）論——メディアは女性をどう変えたか』NHK出版。

笹尾佳代 (二〇一三) 『結ばれる一葉——メディアと作家イメージ』双文社出版。

滝口明祥 (二〇〇九) 『『太宰治』の読者たち——戦後における受容の変遷を中心に』、斎藤理生・松本和也編『新世紀太宰治』双文社出版。

滝口明祥 (二〇一六) 『太宰治ブームの系譜』ひつじ書房。

谷本奈穂 (二〇一三) 『ミドルエイジ女性向け雑誌における身体の「老化」イメージ』『マス・コミュニケーション』八三号・五～二九頁。

宇佐美毅 (二〇一五) 「文学とマスメディア」『日本近代文学』九二号・一四六～一五二頁。

和田芳恵 (二〇一三) 『筑摩書房の三十年』筑摩書房。

米村みゆき (二〇〇三) 『宮沢賢治を創った男たち』青弓社。

—— (二〇〇八) 『教科書掲載作品 小・中学校編』日外アソシエーツ。

付録一 中学校教科書に掲載される太宰作品（初出から 2016 年まで）

	書名	学校種類 教科 種目	著作者	発行者	使用年度	掲載される作品
1	中学校現代の国語 3 新版	中学校 国語 国語	吉田 昇, 木原 茂, ほか 16 名	三省堂	1978～1980	猿ヶ島
2	現代の国語 中学 2	中学校 国語科 国語	土井忠生, 佐伯梅友, 伊藤整 ほか 19 名	三省堂	1966～1968	新樹の言葉
3	国語 三	中学校 国語科 国語	風巻景次郎, 平井昌夫, 上田 幹一	開隆堂出版	1962～1965	走れメロス
4	国語 中学三	中学校 国語科 国語 (総合)	志賀直哉, 辰野隆, 久松潜一, 吉田精一, ほか 13 名	学校図書	1960～1961	走れメロス
5	中学校国語 三年上	中学校 国語科 国語	志賀直哉, 辰野隆, 久松潜一, 今泉忠義, 吉田精一, ほか 24 名	学校図書	1962～1965	走れメロス
6	中学校国語 三	中学校 国語科 国語	志賀直哉, 久松潜一, 吉田精 一, ほか 26 名	学校図書	1966～1968	走れメロス
7	中学校国語 三	中学校 国語 国語	志賀直哉, 久松潜一, 吉田精 一, ほか 29 名	学校図書	1969～1971	走れメロス
8	中学校国語 二	中学校 国語 国語	今泉忠義, 久松潜一, 吉田精 一, ほか 23 名	学校図書	1972～1974	走れメロス
9	中学校国語 二	中学校 国語 国語	今泉忠義, 久松潜一, 吉田精 一, ほか 27 名	学校図書	1975～1977	走れメロス
10	中学校国語 二	中学校 国語 国語	今泉忠義, 久松潜一, 吉田精 一, ほか 27 名	学校図書	1978～1980	走れメロス
11	中学校国語 二	中学校 国語 国語	吉田精一, 西尾光一, 野地潤 家, ほか 21 名	学校図書	1981～1983	走れメロス
12	中学校国語 二	中学校 国語 国語	吉田精一, 西尾光一, 野地潤 家, ほか 22 名	学校図書	1984～1986	走れメロス
13	中学校国語 二	中学校 国語 国語	阿川弘之, 西尾光一, 野地潤 家, ほか 18 名	学校図書	1987～1989	走れメロス
14	中学校国語 2	中学校 国語 国語	阿川弘之, 西尾光一, 野地潤 家, ほか 19 名	学校図書	1990～1992	走れメロス
15	中学校国語 2	中学校 国語 国語	阿川弘之, 野地潤家, ほか 21 名	学校図書	1993～1996	走れメロス
16	中学校国語 2	中学校 国語 国語	阿川弘之, 野地潤家, ほか 29 名	学校図書	1997～2001	走れメロス
17	中学校国語 2	中学校 国語 国語	野地潤家, 安岡章太郎, ほか 22 名	学校図書	2002～2005	走れメロス
18	中学校国語 2	中学校 国語 国語	野地潤家, 安岡章太郎, ほか 23 名	学校図書	2006～2011	走れメロス
19	中学校国語 2	中学校 国語 国語	野地潤也, 安岡章太郎, 新井 満, ほか 28 名	学校図書	2012～2015	走れメロス
20	中学校国語 2	中学校 国語 国語	野地潤家, 新井満, ほか 28 名	学校図書	2016～	走れメロス
21	新版 標準中学国語 二	中学校 国語 国語	西尾実, ほか 19 名	教育出版	1972～1974	走れメロス
22	改訂 標準中学国語 二	中学校 国語 国語	西尾実, ほか 17 名	教育出版	1975～1977	走れメロス
23	新版 中学国語 2	中学校 国語 国語	西尾実, ほか 18 名	教育出版	1978～1980	走れメロス
24	中学国語 2	中学校 国語 国語	木下順二, 松村明, 柴田武, ほか 20 名	教育出版	1981～1983	走れメロス
25	改訂 中学国語 2	中学校 国語 国語	木下順二, 松村明, 柴田武, ほか 24 名	教育出版	1984～1986	走れメロス
26	新訂 中学国語 2	中学校 国語 国語	木下順二, 松村明, 柴田武, ほか 28 名	教育出版	1987～1989	走れメロス
27	新版 中学国語 2	中学校 国語 国語	木下順二, 松村明, 柴田武, ほか 28 名	教育出版	1990～1992	走れメロス
28	新版 中学国語 2	中学校 国語 国語	木下順二, 松村明, 加藤周一, ほか 27 名	教育出版	1993～1996	走れメロス

	書名	学校種類 教科 種目	著作者	発行者	使用年度	掲載される作品
29	中学国語 2	中学校 国語 国語	木下順二, 松村明, 加藤周一, ほか 33 名	教育出版	1997～2001	走れメロス
30	伝え合う言葉 中学国語 2 年	中学校 国語 国語	木下順二, 加藤周一, ほか 36 名	教育出版	2002～2005	走れメロス
31	伝え合う言葉 中学国語 2	中学校 国語 国語	木下順二, 加藤周一, ほか 32 名	教育出版	2006～2011	走れメロス
32	伝え合う言葉 中学国語 2	中学校 国語 国語	加藤周一, ほか 34 名	教育出版	2012～2015	走れメロス
33	伝え合う言葉 中学国語 2	中学校 国語 国語	田近洵一, 北原保雄, ほか 31 名	教育出版	2016～	走れメロス
34	中等新国語 三	中学校 国語科 国語	石森延男, 遠藤嘉基, 小林英夫, ほか 6 名	光村図書出版	1962～1965	走れメロス
35	中等新国語 二	中学校 国語科 国語	石森延男, ほか 10 名	光村図書出版	1966～1968	走れメロス
36	中等新国語 二	中学校 国語 国語	石森延男, ほか 10 名	光村図書出版	1969～1971	走れメロス
37	中等新国語 二	中学校 国語 国語	石森延男, ほか 22 名	光村図書出版	1972～1974	走れメロス
38	中等新国語 二	中学校 国語 国語	石森延男, 井上靖, ほか 20 名	光村図書出版	1975～1977	走れメロス
39	国語 2	中学校 国語 国語	石森延男, 井上靖, ほか 30 名	光村図書出版	1987～1989	走れメロス
40	国語 2	中学校 国語 国語	石森延男, ほか 30 名	光村図書出版	1990～1992	走れメロス
41	国語 2	中学校 国語 国語	栗原一登, ほか 30 名	光村図書出版	1993～1996	走れメロス
42	国語 2	中学校 国語 国語	宮地裕, 渡辺実, 樺島忠夫, ほか 26 名	光村図書出版	1997～2001	走れメロス
43	国語 2	中学校 国語 国語	樺島忠夫, 宮地裕, 渡辺実, ほか 27 名	光村図書出版	2002～2005	走れメロス
44	国語 2	中学校 国語 国語	樺島忠夫, 宮地裕, 渡辺実, ほか 27 名	光村図書出版	2006～2011	走れメロス
45	国語 2	中学校 国語 国語	樺島忠夫, 宮地裕, 渡辺実, ほか 29 名	光村図書出版	2012～2015	走れメロス
46	国語 2	中学校 国語 国語	甲斐睦朗, ほか 27 名	光村図書出版	2016～	走れメロス
47	新しい国語 中学三年	中学校 国語科 国語	柳田国男, 成瀬正勝	東京書籍	1962～1965	走れメロス
48	新編新しい国語 中学三年	中学校 国語科 国語	成瀬正勝, 林大, ほか 15 名	東京書籍	1966～1968	走れメロス
49	新訂新しい国語 二	中学校 国語 国語	成瀬正勝, 阿部秋正, 大石初太郎, ほか 17 名	東京書籍	1969～1971	走れメロス
50	新しい国語 二	中学校 国語 国語	大石初太郎, 阪倉篤義, 阿部秋生, ほか 10 名	東京書籍	1972～1974	走れメロス
51	新訂新しい国語二	中学校 国語 国語	大石初太郎, 阪倉篤義, 阿部秋生, ほか 11 名	東京書籍	1975～1977	走れメロス
52	新編新しい国語 二	中学校 国語 国語	大石初太郎, 阪倉篤義, 高田瑞穂, ほか 17 名	東京書籍	1978～1980	走れメロス
53	新しい国語 二	中学校 国語 国語	大石初太郎, 阪倉篤義, 高田瑞穂, ほか 20 名	東京書籍	1981～1983	走れメロス
54	改訂新しい国語 二	中学校 国語 国語	林巨樹, 古田東朔, 大石初太郎, ほか 27 名	東京書籍	1984～1986	走れメロス
55	新編新しい国語二	中学校 国語 国語	林巨樹, 古田東朔, 阪倉篤義, ほか 31 名	東京書籍	1987～1989	走れメロス
56	新しい国語 2	中学校 国語 国語	林巨樹, 古田東朔, 阪倉篤義, ほか 29 名	東京書籍	1990～1992	走れメロス
57	新しい国語 2	中学校 国語 国語	久保田淳	東京書籍	1993～1996	走れメロス
58	新編新しい国語 2	中学校 国語 国語	久保田淳, ほか 26 名	東京書籍	1997～2001	走れメロス
59	新しい国語 2	中学校 国語 国語	三角洋一, ほか 30 名	東京書籍	2002～2005	走れメロス
60	新編新しい国語 2	中学校 国語 国語	三角洋一, 相澤秀夫, ほか 29 名	東京書籍	2006～2011	走れメロス
61	新しい国語 2	中学校 国語 国語	三角洋一, 相澤秀夫, ほか 35 名	東京書籍	2012～2015	走れメロス

	書名	学校種類 教科 種目	著作者	発行者	使用年度	掲載される作品
62	新編新しい国語 2	中学校 国語 国語	三角洋一, 相澤秀夫, ほか 38 名	東京書籍	2016～	走れメロス
63	中学校現代の国語 新版 3	中学校 国語 国語	土井忠生, 佐伯梅友, 金田一京助, ほか 22 名	三省堂	1969～1971	走れメロス
64	現代の国語 2	中学校 国語 国語	金田一春彦, ほか 29 名	三省堂	1993～1996	走れメロス
65	現代の国語 2	中学校 国語 国語	金田一春彦, ほか 29 名	三省堂	1997～2001	走れメロス
66	現代の国語 2	中学校 国語 国語	金田一春彦, 長谷川孝士, ほか 23 名	三省堂	2002～2005	走れメロス
67	現代の国語 2	中学校 国語 国語	金田一春彦, 長谷川孝士, ほか 40 名	三省堂	2006～2011	走れメロス
68	中学生の国語 二年	中学校 国語 国語	中洲正堯, ほか 42 名	三省堂	2012～2015	走れメロス
69	現代の国語 2	中学校 国語 国語	中洲正堯, ほか 39 名	三省堂	2016～	走れメロス
70	国語 二 中学校用総合	中学校 国語科 国語 (総合)	岡崎義恵	日本書院	1959～1961	走れメロス
71	国語 二 中学校	中学校 国語科 国語	岡崎義恵	日本書院	1962～1965	走れメロス
72	新中学国語総合 新訂版 三上	中学校 国語科 国語 (総合)	能勢朝次, 石井庄司	大修館書店	1958～1961	走れメロス
73	新中学国語 三	中学校 国語科 国語	石井庄司	大修館書店	1962～1965	走れメロス
74	国語総合編 中学校二年上の	中学校 国語科 文学と言語とを総合したもの	時枝誠記	中教出版	1956～1961	走れメロス
75	中学国語 二年下	中学校 国語科 国語 (総合)	土岐善麿, ほか 7 名	中教出版	1959～1961	走れメロス
76	国語 二 中学校用	中学校 国語科 国語	西尾実, 大村浜, 市川孝, ほか 5 名	筑摩書房	1966～1968	走れメロス
77	新版 国語 2 中学校用	中学校 国語 国語	西尾実, 大村浜, 市川孝, ほか 5 名	筑摩書房	1969～1971	走れメロス
78	中学校国語 三年	中学校 国語科 国語	山岸徳平, 服部四郎, ほか 6 名	大日本図書	1962～1965	走れメロス
79	中学国語 2	中学校 国語科 国語	山本有三, 石井庄司, ほか 27 名	日本書籍	1966～1968	走れメロス
80	中学国語 2	中学校 国語 国語	山本有三, 石井庄司, ほか 28 名	日本書籍	1969～1971	走れメロス
81	中学国語 二	中学校 国語科 国語	高木市之助, 熊沢竜, 井上靖, ほか 13 名	大阪書籍	1966～1968	走れメロス

教科書目録情報データベース, 東書文庫教科書図書館データベースと『教科書掲載作品 13000』に基づき, 作成したものである。